

ローマ人への手紙4章「信仰の父アブラハム」

1A 肉によらない 1-15

1B 行ないによらない 1-8

1C 事例 - アブラハム 1

2C 理由 2-5

1D 誇り 2-3

2D 借り 4-5

3C 結果「幸い」 6-9

2B 割礼によらない 9-12

1C 理由 - 割礼前の義認 9-10

2C 意味 - しるし 11

3C 目的 - 無割礼の義認 12

3B 律法によらない 13-15

1C 理由 - 律法前の約束 13

2C 意味 - 違反 14-15

2A 信仰による 16-25

1B 対象 - 神 16-18

1C 神の恵み 16

2C 神の力 17-18

2B 過程 - 4つの鍵 19-21

1C 問題の無視 19

2C 疑いの拒否 20a

3C 神への賛美 20b

4C 全能への信仰 21

3B 結果 - キリストを信じる信仰 22-25

1C アブラハムの模範 22

2C キリストの復活への信仰 23-25

本文

ローマ人への手紙ですが、さっそく4章1節を読みます。

1A 肉によらない 1-15

1B 行ないによらない 1-8

1C 事例 - アブラハム 1

1 それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。

パウロは、4章を「それでは」という言葉ではじめています。ここは、「したがって」とも訳すことができます。つまり、4章は3章からの話の続きです。

私たちは3章において、神の義は、イエス・キリストを信じる者を義と認めくださることによって現れたことを学びました。1章 18 節から3章 20 節において、神の前で私たちが罪に定められていることを知りましたが、イエス・キリストが、そのさばきを身代わりに受けてくださったので、私たちは、キリストにあって、その罪に問われることがなくなりました。そして、パウロは、信仰によって義と認められることについての特徴を話しました。それは、誇りが取り除かれること、割礼を受けたものだけではなく、無割礼の者も義と認められることができること、そして律法を確立することです。

このように、義と認められるときには、「信仰」という要素が必要になります。そこで、パウロは、4章において、アブラハムを例に取りながら、信仰によって義とみなされることはどういうことなのかを説明します。3章においては、信仰義認のうちの「義認」について力点が置かれていましたが、4章では信仰義認のうちの「信仰」について力点が置かれています。

「肉による私たちの先祖」とは、ユダヤ人の先祖のことです。アブラハムは、イスラエル民族の始祖であります。パウロは、信仰による義は、ユダヤ人の先祖アブラハムに見ることができ、何も新しいものではないことを論じています。そしてパウロが、「私たちの先祖」と言っているように、パウロは自分をユダヤ人とみなし、またこの手紙の読者にも、多くのユダヤ人がいることを意識して書いています。

2C 理由 2-5

1D. 誇り 2-3

2 もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。しかし、神の御前では、そうではありません。3 聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。

アブラハムの生涯を思い出してください。彼は 75 歳の時に主に呼ばれて、ウルを離れました(創世 12:4)。それから、85 歳の時に主が語られて、子孫が空の星のようになることを語られました。そして、この言葉であります。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」彼がその後、すぐれた行いをしました。その頂点が、イサクを主に捧げようとした姿です。しかし、彼はそこで義と認められたのではなく、行ないをする前に義と認められています。そして、それは「神を信じた」から、義と認められたのです。

私たちの生活が、神が神であるがゆえ、神が語られたという理由だけで、それを信じて生きているでしょうか？これが正しい者としての生き方です。行ないによれば、「私はこれだけのことをしたのに、どうして認められないのだろう。」という誇りがあり、神が認めないとカインのように怒り、落

ち込むことになります。しかし、何も行なっていない時にアブラハムは義と認められているのです。

しかし、神を信じているということは、そこに神の主権にひれ伏すこと、自分を明け渡すことが含まれます。その中で主に御声に聞き従う中で、行ないの実を結びます。その結実が、神にイサクを捧げようとしたことです。それでヤコブの手紙 2 章 21 節にある、一見矛盾したように聞こえる御言葉を理解できるのです。「2:21 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行ないによって義と認められたではありませんか。」

2D 借り 4-5

4 働く者のばあいに、その報酬は恵みでなくて、当然支払うべきものとみなされます。5 何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。

パウロは、行ないによって義と認められるのであれば、それは、仕事における雇用関係であることを述べています。仕事の契約においては、賃金を払う義務がありますが、もし私たちが神とそのような関係にあるのであれば、ここでパウロが言っているように「恵み」ではありません。しばしば、神に仕える時に、自分が人から報いを受けられるような形で仕えようとしています。人目につくようなこと、目立つこと、そのようなものだったらやる気を出すのに、そうでないものには忠実になれない人たちがいます。それは、神の恵みを知らないから起こっていることです。報いが与えられるように動いているからです。

しかし、恵みによれば、すでに報いを受けています。全く何の働きもないのに、主が自分を義と認めてくださるのです！ただ信頼しているということだけで、主がその信頼によって私たちに正しいとしてくださっているのですから、もうそこで神との正しい関係の中で憩うことができるのです。しかも義と認めてくださるのは、「不敬虔な者」であります。自分が不敬虔な者である、神を敬っていない、そうした罪深さ、また肉の弱さを知って十字架に行くからこそ、その人を神は義と認めてくださいます。

3C 結果「幸い」 6-9

6 ダビデもまた、行ないとは別の道で神によって義と認められる人の幸いを、こう言っています。7 「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、幸いである。4:8 主が罪を認めない人は幸いである。」

パウロが、まだユダヤ人として、ユダヤ人に語っていることを思い出してください。パウロは、信仰による義を、ユダヤ人の父アブラハムからだけではなく、ユダヤ人の王ダビデの言葉からも論証しています。ユダヤ人のルーツは、アブラハムそしてダビデにあります。そのダビデもまた、行ないではなく義と認められているのです。彼は、姦淫の罪と、それに引き続く殺人の罪を犯しました。それにも関わらず、「主は、あなたの罪を赦された。」と宣言されたからです。彼は、罪を赦されただけではなく、主が、罪を認められないことを喜びました。主がダビデに指をさして、「お前は、この

ような悪を行なったのだ。」とお責めにならず、かえって、その罪を忘却のかなたに捨ててしまわれました。彼もまた、行ないによらない義と認められた人の代表例です。

2B 割礼によらない 9-12

こうして、アブラハムが行ないによって義と認められたのではないことが分かりましたが、次に、彼は、割礼を受けたことによって義と認められたのではないことを論じます。

1C 理由 - 割礼前の義認 9-10

9 それでは、この幸いは、割礼のある者にだけ与えられるのでしょうか。それとも、割礼のない者にも与えられるのでしょうか。私たちは、「アブラハムには、その信仰が義とみなされた。」と言っていますが、10 どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときにでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。

ユダヤ人にとって、神の救いというのはユダヤ人になることでした。異邦人が救われるということは、ユダヤ人の神の共同体の中に入ることを意味し、それゆえその共同体に入るための、神の契約の印である割礼を受けることでありました。しかしユダヤ人の父祖であるアブラハム自身が、実は無割礼であった時に義と認められており、無割礼のままに神に受け入れられていたのです。言わば、アブラハムがまだ異邦人であった時に義と認められました。

彼が割礼を受けたのは、99 歳の時です(創世 17 章)。義と認められたのは 85 歳の時であり、イシュマエルが 13 歳の時でした。14 年前に既に義とみなされていました。したがって、割礼の有無は義と認められるのに無関係であることが分かります。

2C 意味 - しるし 11

11a 彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。

ここに割礼を受けることの意味が述べられています。割礼は、それによって神との関係を築くことではなく、すでに築かれた関係の目印でありました。すべての儀式は、神と私たちとの霊的な関係を、外側で確認するものでありました。そういった意味で、水のバプテスマも同じ働きをしています。キリストと共に、罪が葬られた。そしてキリストと共に、新しい命にあって甦ったことを、外側で確認するものです。

割礼については、すでに旧約聖書から、神との間に妨げとなっている、切り取らなければいけないものとしての比喩で用いられています。「申命記 10:16 あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もうなじのこわい者であってはならない。」心にある包皮、主との関係に邪魔になっているも

のを取り除かないといけません。その献身があってこそその割礼の儀式であります。

3C 目的 - 無割礼の義認 12

11b それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、12 また割礼のある者の父となるためです。すなわち、割礼を受けているだけではなく、私たちの父アブラハムが無割礼のときに持った信仰の足跡に従って歩む者の父となるためです。

ここに、割礼を受けていない者も義と認められることが述べられています。つまり、異邦人である私たちも、神との関係を結ぶことができるということです。割礼のような儀式によって、私たちは神との関係を持ちません。あくまでも、「アブラハムの信仰の足跡に従って歩む」という原則によって、神との生きた関係を持ちます。私たちは、アブラハムに倣う者にならなければいけません。アブラハムがどのように神に召されて、どのように神を信じるに至ったか。アブラハムに、神がどのように良くてくださり、アブラハムがどのように神を個人的に、恵みの神として知るようになったか。また、そのような神への深い信頼のゆえに、イサクをささげなさいと言われたときに、イサクをよみがえらせることができる、と信じるようになったか。これらのことを私たちが、毎日の生活で、アブラハムにならなければいけないのです。

したがって、当時、「私たちの父はアブラハムです」と言ったユダヤ人に対して、イエス様が「あなたがたの父は悪魔です。」と言われたように、ただ教会に来ているからということで、その形にいるから私は神に受け入れられるという保証は、全くないことを知るべきです。あくまでも、アブラハムを父と仰いで、彼が神を信じたように自分も積極的に、主体的に歩んでいることによって、初めてアブラハムを父と仰ぐことができます。

3B 律法によらない 13-15

1C 理由 - 律法前の約束 13

13 というのは、世界の相続人となるという約束が、アブラハムに、あるいはまた、その子孫に与えられたのは、律法によってではなく、信仰の義によったからです。

アブラハムに、「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。」と主が約束してくださったのは、律法が与えられてからでしょうか。もちろん違います。律法がモーセに与えられたのは、アブラハムが生きている 500 年ほど後のことです。アブラハムとその子孫が世界の相続人となることは、律法とは無関係のことです。

神のものを受け継ぐのは、信仰によってであります。主に仕えている者が、多くのものを任される時に、信じるのではなく、自分に課した規則によって成し遂げられると思っているのであれば、とんでもないことです。主から与えられるわずかな物に、そこに信仰を働かせて仕える時に、その忠実さが後に大きなものを任されることとなります。

2C 意味 - 違反 14-15

14 もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。15 律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。

約束というのは、神がこうこうしてくださるという、神の恵みに基づくものです。ただ信じることによって、神の恵みが働いて、それで神が自分を通してご自分の国を広げてくださいます。ところが、律法によれば違反が伴います。なぜなら、やればやろうとするほど、それを破っている、できていないことに気づくからです。自分の行ないを確かめてみてください。ある時はしっかりとやっているようで、またある時は止めている。それは、基準に到達しようとする律法によるものであり、それは決して達成できないので、律法に違反したようになっているからです。しかし、約束であれば信じるものです。そこには神の恵みが働いています。確かに神のものを相続できます。

2A 信仰による 16-25

こうして、アブラハムが義と認められたのは、行ないによるのでもなく、割礼によるのでもなく、律法によるのでもないことが分かりました。それでは、何によって義と認められたかという、信仰によります。16 節からは、アブラハムがどのようにして神を信じていったのか、その「信仰」そのものに迫ります。

1B 対象 - 神 16-18

1C 神の恵み 16

16 そのようなわけで、世界の相続人となることは、信仰によるのです。それは、恵みによるためであり、こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。「わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。」と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。

パウロは、アブラハムは、すべての人の父であることを繰り返しています。アブラハムは肉による子孫であるユダヤ人だけの父ではなく、むしろ、信仰によって義とみなされた異邦人の父でもあります。ここに、神の恵みがあります。神は、ご自分の祝福を受けるに値しない者にも手を伸ばされるような、恵み深い方です。ですから、信仰を持つということは、この神の恵みを知っていることに他なりません。自分が神から落ちてしまった、どうしようもなく失敗してしまった。そのような敗北感を持っている人は、まさにその姿で神はあなたを義人としてくださるのです。それが神の恵みです。

神の恵みを知るときに、パウロがここで述べているように、「保証」があります。神との関係が、あるときには悪くなり、あるときには良くなるというような不確かなものではなくなります。私たちがどのようなことを行なっても、私たちがどのような状態にいても、神は変わらずに私たちを義とみなしておられます。それゆえ、神との関係が安定して、私たちは、神と絶えざる交わりをすることができるのです。

2C 神の力 17-18

17 このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るものようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。

信仰を持つということは、神の恵みを知っているだけではなく、神の力を知っていることでもあります。神は、死んでいる者を生かすことができになり、何も無いところから有形のものを創造する力を持っておられます。この全能の神をアブラハムは信じていたのであり、私たちもこの神を信じているのです。アブラハムは、イサクをささげるとき、この子から神の祝福がもたらされるという約束を信じていました。けれども、イサクをほふりなさいと言われたのも、同じ神です。

したがって、神は矛盾するようなことを言われたのですが、アブラハムはどちらのみことばも信じました。そこは、自分の知性という神を捨て去らないといけません。主が言われたからという、神の主権だけを認めて、その言葉に従順になることです。そこで、彼は、わが子イサクをほふっても、神はこの子を死者の中からよみがえらせてくださる、と信じたのです。神なら、そのようなことができになると信じました。私たちはこのような、復活の信仰を持っているでしょうか？

18 彼は望みえないときに望みを抱いて信じました。それは、「あなたの子孫はこのようになる。」と言われていたとおりに、彼があらゆる国の人々の父となるためでした。

望みえないときに望みを抱く、という言葉は大切です。私たちが信仰を持っているというのは、人間ができることのみを信じることではありません。むしろ、人間には不可能であることが神にあって可能になることを信じているのです。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。(マルコ 10:27)」というイエスさまのことばを信じなかつたら、弟子たちは主の復活を信じることはできなかつたでしょうし、私たちもクリスチャンになることはできません。そして、私たちが、日々の生活の中で、同じように望みえないときに望んでいるときに、信仰によって生きていけると言えます。

2B 過程 — 4つの鍵 19-21

このように、信じるということは、神に対する信仰であり、神の恵みとその御力を信じることでした。次にパウロは、アブラハムがどのようにして、神を信じたのかについて説明します。彼が信じるときの過程、プロセスについて語ります。

1C 問題の無視 19

19 アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが生きたも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。

アブラハムが 99 歳のときに、主の使いがアブラハムのところに訪れて、「わたしは来年の今ごろ、

必ずあなたのところに戻って来ます。そのとき、あなたの妻サラには、男の子ができています。(創世 18:10)」と言われました。サラはそのとき、90 を越えていました。ですから、どちらも子を生むような能力がなくなっていたときでした。けれども、アブラハムは、そのような問題に目を留めずに、そのことを言われた主に目を注いでいました。ここが信じることの第一歩です。問題があるときに、その問題を見つづけずに、主を仰ぎ見る必要があります。

2C 疑いの拒否 20a

20a 彼は、不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず、

次の一歩は、神の約束を疑わないことです。主が語られたのに、何かが起こるとすぐに揺らいでしまいます。人の言葉や約束はしっかりと信じるのに、神の言葉や約束については疑うことがしばしばです。しかし、ヨシュア記でこう書いてあります。「21:45 主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つもたがわず、みな実現した。」

3C 神のへ賛美 20b

20b 反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、

状況はマイナス面ばかりなのに、アブラハムは、ますます確信を強めました。そして、その確信によって、なんと神を賛美していたのです。先ほど、神はないものがあるもののように呼ばれる方であることを読みましたが、アブラハムも同じように、まだ存在していないものをはるかに見て、それを喜び、神に感謝して、神を賛美しました。まだイサクが生まれていないのに、すでに生まれていたかのように喜んだのです。

神を信じるということは、神と同じように時間を超えて、永遠の中に入ることでもあります。神にとって、万物万象はすでにくずれさり、新しい天と地が造られています。神にとっては、キリストにあって私たちがすでに、栄光の姿に変えられています。主が来られることも、すでに事実であり、私たちは、その栄光を、喜びをもって待ち望んでいるのです。ゆえに、私たちは今、この地上においても、神の約束を信じて、まだ成就を見ないうちに喜ぶのです。

4C 全能への信仰 21

21 神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。

最後に、アブラハムは、神が力をお持ちなのを信じていました。私たちは、神を自分たちの思いの中で小さくしてしまいます。これなら私たちにできるが、これならできないと私たちは選別して生きているのですが、それと同じことを神にも当てはめてしまうのです。けれども、神は、ご自分が語られたことばによって、この天地を造られたことを思い出さなければいけません。イザヤは、こう預言しました。「見よ。国々は、手おけの一しづく、はかりの上のごみのようにみなされる。見よ。主は

島々を細かいちりのように取り上げる。(40:15)日本列島で起こることなど、主にとっては細かいちりのようであられるのです。さらに、イザヤは、雨が天から地に落ちてくるように、「そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。(55:11)」と言いました。

3B 結果 — キリストを信じる信仰 22-25

1C アブラハムの模範 22

22 だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。

この「だからこそ」という接続詞が大切です。彼が義と認められたのは、今見た、アブラハムの神への信仰のゆえです。信仰によって義と認められることは、これほど躍動的なことであり、生き生きとしたものです。「善を行なうために、悪をしようではないか。」というパウロへの非難とは、程遠いものであります。律法によっては決して実現されなかった、神との生き生きとした交わりこそ、信仰であり、それによって義と認められることであります。

2C キリストの復活への信仰 23-25

23 しかし、「彼の義とみなされた。」と書いてあるのは、ただ彼のためだけでなく、24 また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。25 主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。

アブラハムがイサクについて、神に抱いた望みは、実は、後に来るキリストの復活を信じることを指し示していました。神が主イエスを死者の中からよみがえらせた方であることを信じる信仰を、神は義とみなされます。主は復活によって、ご自身が正しいことを証明されました。罪を犯したから死なれたのではなく、罪を犯されなかったのに死なれ、それゆえよみがえることができました。

そして、これを信じる者をも、正しい者の行列の中に入れてくださるのです。その復活による義の証明を、信じる者たちにも分かち合ってください。キリストが死なれたのは私たちの罪のゆえですが、義と認められるのは、キリストの復活のゆえであります。多くの人が罪の赦しに留まっており、義と認められるところまで至っていないことが多いです。義と認められるからこそ、他の人の評価を気にする必要はなく、神の側にいることができます。また規則の基準に達しようとすることもなく、ただ神に信頼して、その御声に聞き従います。